

法人名称を「一般財団法人前川ヒトづくり財団 21」に変更いたしました

深川高齢者センター21は8月21日より名称を変更いたしました。

平成9年に設立以来、“特に高齢者”の活性化を通じ、社会の活力と経済の維持、発展に寄与することを目的とし、活動を続けてまいりました。今後、労働力人口が減る中で人員を量的に確保することは難しくなっており、人材の質的向上をいかに進めるかが大きな課題になってきています。また、市場のニーズは高度化・複雑化し、その変化も早くなっております。そのようなニーズにタイムリーに responding していく人材、すなわち長期的なビジョンをもち、様々な経験や考えの人たちとのすり合わせから新しい価値の創造を導く人材が求められています。

さらに動の時代（20、30、40代）の体験と工夫が、静の時代（50、60、70代）の人生をより充実させるということが分かってきました。

当財団は今後、従来の高齢者に対する事業を若年層へも広げて若者からベテランまでのトータルな人づくりを目指します。それをベースに「動と静の融合によるイノベーション」から「21世紀のすみわけ」の実現へ向う仕組みを皆様と一緒に作り上げていきたいと願っております。

今後とも皆様のご支援、ご協力を賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。

※住所、電話番号等は変更ございません。ホームページアドレス、お問い合わせメールアドレスは下記に変更となりますので宜しくお願いいたします。

ホームページアドレス：<http://www.mpic21.org>

メールアドレス：mail@mpic21.org

「動と静研究会」を開催しました

「動と静研究会」の第1回目（7/17）、第2回目（8/28）を開催いたしました。

第1回目は前川製作所のベテラン世代に対する取り組み事例をご紹介します。それに対する質問や皆さんが抱えている具体的な課題を挙げていただきました。議論は各企業において「静が活かされて生きる場づくりとは」「静の力をいかに発揮するか」さらに「企業の社会的存在意義」等々、多岐にわたり大変盛り上がりしました。

第2回目は第1回目の議論を踏まえ、参加企業様の事例を取り上げ、具体的且つ掘り下げた議論となりました。ベテラン世代が活躍する仕組みは、各企業が培ってきた文化・風土の上に成り立つものです。

第3回目では企業にとってより個別具体的な気づきへつながる議論にしたいと考えております。

当財団では上記研究会の他に「すみわけ研究会」等を企画しております。ご参加希望、研究テーマなどご要望がございましたらお気軽にお問い合わせください。

【コラム】「金のなる木」は「正直の根」に繁茂する

今回は趣向を変えて、江戸時代に庶民に広まった幸福になるための教訓をご紹介します。平易な文章の中に現代の私たちもハッとすることが説かれています。

美^み目^めは能^よくても富^ふ貴^きでも
其^その正^{せい}直^{ちく}が天^{てん}道^{だう}の
慈^じ悲^ひのふ^ふか^かき^きを中^{ちゆう}心^{しん}に
万^{よろづ}に程^{ほど}のよ^よき^きう^うえ^えに
左^さ右^うの枝^{えだ}木^き一^{いっ}本^{ぽん}も
第^{だい}一^{いつ}家^け内^{うち}む^むつ^つま^まじ^じき^き
い^いさ^さぎ^ぎよ^よき^きこ^こそ^そ頼^{たの}母^も敷^しき^き
つ^つい^いえ^え（費^{たい}え^え）のな^なき^きを専^{もつ}ら^らに
親^{おや}へ^への孝^{こう}に^にな^なる^るぞ^ぞか^かし^し……

嘘^{うそ}ほ^ほど^ど人^{ひと}の瑕^{きず}は^はな^なし
金^{かね}の^のな^なる^る木^きの^の根^ね本^{ぽん}ぞ
す^すぐ^ぐ（直^{ちく}）な^なる^る幹^{こずえ}の^の梢^{こずえ}ま^まで
神^{かみ}や^や仏^{ぶつ}の^の添^そえ^えた^たま^まう
聞^きい^いて^てそ^その^の身^みに^に行^いわ^わば
し^しん^んぼう^{ぼう}づ^づよ^よき^き心^{こころ}根^ねの
朝^{あさ}起^あき^き、か^かせ^せぎ^ぎ、油^{あぶら}断^たな^なき
常^{とこ}に^に養^{やしやう}生^{せい}よ^よき^き人^{ひと}は

本文の大意は、次のようなものです。

だれもが無病長命や富貴を願うが、それでも病気になる、早死にし、貧乏になるのは、前世で蒔いた種が現世で芽を出すからである。三千人の弟子を持ち、人の道を説いた孔子でさえ、世継ぎの男子を失い、一生貧苦の生活だった。逆に、盗跖は殺人や強盗を繰り返したが、無病で達者に長生きし、金銀豊かに暮らした。これも前世の種の結果である。

この因果の道理は神儒仏の万代不易の掟で、前世の種が現在の苦楽となり、現在の善悪が後世の苦楽となる。だから、偽りや妄語を慎み、何事も律儀に控えめにせよ。万事、正直な人にこそ神仏のご加護がある。因果の道理を信じれば、わが身も人も、鏡に映して見るがごとく過去や未来を見通せる。因果の現れに遅速の違いはあっても、毛筋ほども違わず報いが来る。

小善・小悪も積もれば大きな報いとなることを十分弁え、小悪は恐れて慎み、小善は捨てずに実行せよ。わが身の後世と子孫を思うなら、分相応に慈悲善根

の種を蒔け。小さな施しにも果報がある。ましてや、大きな施しは限りない福德円満をもたらす。ただし、施しを「人にくれる」と考えず、「借り物を返す」と考えよ。わずかでも真心の施しには大きな功德がある。逆に、多大な施しを恩に着せてはならないし、それは功德が少ない。

…乞食を見たら不憫とと思って多く施し、さらに早起きして家業に出精すれば、自然と「無病息災」の葉が出て「福德自在」の花が咲き「子孫繁栄長久」の実を結ぶことは疑いない。

要するに、「善因善果」「悪因悪果」という仏教の縁起観に基づく心得で、「正直」を基本に他の徳目を守れば幸福になると諭す。この「金のなる木」は、江戸後期から明治初年まで版本や刷り物で相当に普及しており、中には、この図を床の間に掲げて「家訓」とした商家もあったほどだった。江戸後期における「正直」思想の庶民への浸透には、「金のなる木」が一役買っていたのである。

『江戸に学ぶ人育て人づくり』
(小泉吉永 著角川SSC新書 2009/03)より抜粋